

### ■H31.06.04 市長定例記者会見内容

日時 令和元年6月4日(火)午後3時~4時30分

場所 庁議室

出席 市長、副市長、危機管理監、地域創生部長、農林水産部長、地域創生部交流推進調整監、市長公室長  
酒田記者クラブ 5社(山形新聞、荘内日報、朝日新聞、毎日新聞、河北新報、NHK、YBC、SAY)

### ■市長発表内容

#### 【酒田市国際交流協会(仮称)の設立について】

6月24日(月)、酒田市国際交流協会(仮称)を設立します。

今年にはロシアのジェレズノゴルスク・イリムスキー市と姉妹都市締結40周年、来年には中国の唐山市と友好都市締結30周年を迎える。このほか、アメリカのデラウェア市との姉妹都市締結や、ロシアのサンクトペテルブルク市、ポーランド共和国との交流が始まるなど、都市間交流が一層広がりを見せている。

また東京オリンピックのホストタウン登録、外航クルーズ船の寄港など、近年は海外からの観光客も多く受け入れており、「おもてなし市民会議」の活動に見られるように、本市ではこれまで以上に国際交流活動が活発化している。

酒田市国際交流協会(仮称)は、これらの国際交流活動により多くの市民が気軽に参画し、その活動を支えるための組織として設立するものであり、将来的には経済・観光交流活動に繋がる事業展開も視野に入れている。

酒田市国際交流協会(仮称)は、国際交流活動の経験を持つ市民と関心のある市民をつなぐネットワークを作り、アドバイスやコーディネートを行うほか、さまざまな国際交流事業の連携・調整を横断的に行い、情報共有、人材やノウハウ活用のためのプラットフォームとしての役割を担うことを期待している。

#### 【質疑応答】

記者/国際交流サロンで行っていた内容と、この協会ですらうとしていることの違いは何か。

市長/サロンの活動をもっと広範囲に行う活動母体として育てていきたい。留学生に対する支援、ホストタウンの奨学生に対する組織だった支援など、一部の人は知らないことを国際交流協会というプラットフォームを通じてPRを図っていきたい。通訳やガイドの裾野を広げていくことも想定している。従来の国際交流サロンの機能をもっと拡充していきたい。特にポーランドなど全く経験がない交流の対象がこれから出てくるので、個々に動いていたのでは成果が出づらいため、大きな組織が必要だと考えた。地域創生部交流推進調整監/各国ごとの交流組織ごとに動いていた経緯がある。それを

市民で共有できないか、市民の手に届くような交流活動ができないかということを考えている。サロンの方は在住外国人などの共生社会を含めた地域の中の活動。そういったすみわけがある。

記者／サロンは今後も存続する予定か。

市長／そのとおり

記者／人的スタッフを増やしたのか。

地域創生部交流推進調整監／1人国際交流推進員として交流観光課に配置している。

市長／いずれ増やしていかなければならない場面があると思う。活動が充実すればするほど大きな組織になっていく可能性はある。今までの国際交流は、どちらかというところ行政が旗を振らないと動かないことが多かった。他団体で行っているものには行政はタッチしないことが多かった。民間、行政を問わず国際交流を行う風土を作るには、母体となるコントロールする組織が必要と考え立ち上げる。

記者／なぜ今までこういった組織がなかったのか。

市長／交流都市として旗を掲げたのは、私が市長になってから。交流人口を拡大していかないと、人口はどんどん減っていくので街の存続ができなくなってくるので交流都市という旗を掲げた。交流人口の中には、外国の方々も入ってくる。外国船などインバウンドがここ4年間でたくさん湧き出たような気がする。国際交流活動で街の振興を図ろうという基盤がこの地域にはなかった。なぜか遊佐や庄内町にはある。なぜ酒田にないか疑問に思って、なにか母体を作らないとダメだと。おもてなし市民会議は日本人、外国人など問わずに盛り上げようという組織にしようと思った組織であるが、国際交流となると「言葉」が出てくる。経済交流、産業交流といったものが出てきたときに、地元の業者にアドバイスするような専門的なノウハウなどが、国際交流だと必要になってくる。特殊な部門なので組織を独立させて作りたいという思いがあった。なぜ酒田になかったかというところ、国際交流で街を発展させようという思いが強い市長がいなかったのかなど。

記者／おもてなし市民会議はいつごろできたのか。

市長／平成29年2月。おもてなししたいと思っても、相手にそうのように受け取ってもらわないと意味がない。受け取ってもらえるようなおもてなしを、市民が共有するためには、お互いに学びあわないといけない。そのような組織として作った。これから東北公益文科大学で留学生を集めていこうという動きをしている中で、大学まちづくりという理念を掲げているので大学と一緒に、また大学を街が支えていこうという関係にしたい。留学生が仮にどんどん来ることになると、生活などを大学と一緒にバックアップする組織体がないとなかなか難しい。それも視野にいれながら国際交流協会を母体にしていきたいと思う。

記者／過去にさかのぼっても、このような組織が必要だという議論はなかったか。

地域創生部交流推進調整監／平成11年に国際交流サロンを作ったときに、国際交流活

動をしている団体意見交換をした。そのときも機運があればぜひ作りたいという思いがあったが、意見交換の際にはそのような組織がほしいという意見が上がらなかった。各団体が個々に国際交流をしていて、それを広げようといった声は全く出てこなかった。その後も組織化に関する意見は出ていなかったと思う。

記者／平成11年ごろにサロンを立ち上げたのには理由があったのか。

地域創生部交流推進調整監／中国系の移住者が増え、交通ルールやゴミ出しルールなど日本の生活のことを教えよう、伝えようという動きが全国的にもあった。外国人移住者が増えるといった都市の環境が変わり始めたころだと思う。

市長／帰国者や移住者への支援のためだったと思う。

記者／県内の他市には、こういった組織はあるのか。

市長／全てではないが、主要なところにはある。

地域創生部交流推進調整監／県の国際交流協会もある。

記者／市民がおもてなし市民会議と混在してしまい、混乱の原因にならないか。おもてなし市民会議の活動や機能を拡大して、国際交流協会が発展的に立ち上がるのならわかりやすいが、改めて別に立ち上げることになった理由は何か。観光物産協会との連携はとっていき、発展させる考えはあるのか。

市長／おもてなし市民会議とのすみ分けは多少気になっているところもある。国際交流となると、さまざまな機関や助成金など、おもてなし市民会議では受けきれないような専門的なことをしていく組織と位置づけている。観光物産協会はどちらかというと日本人観光客が対象と考えている。おもてなし市民会議の会長は私になっている。国際交流協会は行政お抱えではなく市民中心に専門性に長けた人を選任する。

記者／国際交流協会の中に一部会としておもてなし市民会議組織があるといったピラミッド型のような構想はあるのか。

市長／おもてなしは、国際交流だけではない。逆はあるのかもしれない。たとえばおもてなし市民会議が公益財団法人として、行政ではない組織となり一人歩きできる強固な組織であれば、協会がその中の組織としてはまり込むことはありうる。おもてなし市民会議はまだ強固な組織になっていない。二つの組織が後に一体化していくのかは、見守っていく必要がある。

記者／機会があれば、観光関係、おもてなし関係、国際交流関係の団体の体系図的なものを見せてもらいたい。

市長／もう一つ、観光戦略の機構も年内に立ち上げようとしている。それぞれの組織で動き方が専門分化している。機構に関してはツアーなどを組み、実際に稼ぐことができるものになってもらいたい。これは行政にはできないとで、おもてなし市民会議にこれができるかという、なかなかそこまではできない状況である。国際交流協会は語学や契約など専門性の高いもの、観光戦略機構はツアーなどで客を引っ張り地元にお金が落ちる仕組みづくり、おもてなし市民会議はボランティア活動でお手伝いをする、この3

つを一つの組織にするのは考えられない。なので、切り分けをして立ち上げる経緯に至った。

【懇談・フリー質問（幹事社）山形新聞社】

記者／大連・唐山での成果と手ごたえについて伺いたい。

市長／大連については、9月に北前船の寄港地フォーラムを酒田で開催するとき、大連の旅行会社の方をターゲットにした観光の売込みを同時にしたいこともあり、酒田においでくださいというご案内も兼ねて訪れた。中日文化観光大連交流大会があり、そこで関係者に9月のイベントの売り込みをしてきた。全国各地から要人が訪問したので、一定程度アピールはできたと思っている。

唐山については京唐港と酒田港を結んでコンテナ航路を開設できないかという交渉で訪問した。友好都市として来年30年を迎えるわけだが、この縁を使って経済交流の道筋をつくりたく、航路開設の仕掛けをしに行ったというのが本当の狙い。資料にあるとおり、国際定期コンテナ航路が結ばれた。釜山港を経由する形で唐山市の京唐港と酒田港が結びつくことが今回決まったことを報告する。週2便程度京唐港と結ばれることになる。輸出であれば8日～10日、輸入であれば11日で互いの港を行き来できる。5月10日ごろに航路を開設しましたという発表を聞いて驚いた。京唐港まで直接航路を引きたい思いはあったが、コンテナの量が少なかったため、将来的な課題にすることを先方の代表と話した。既存の航路に接続する形で荷物のやり取りができる航路開設ならばと、協調運航による両港の航路開設が決まった。今後は日本酒、米、加工食品といった中国に受け入れられやすいものを想定し京唐港に送り込みたい。7月8日にどういったものが輸入できるか中国側から先遣部隊が酒田に来る。いいものが提供できるよう体制を整えて行く。

北京と大連では医療機関との懇談も行なってきた。研修の場として医療人の交流も広げられないか検討していく。

CCTVとの懇談の中で、農業チャンネルを持っているのでぜひ酒田の農業を取材させてほしいとの申し出があった。取材に応じるかは引き続き協議していく。農業技術の高度化に興味を持っているようだった。取材に応じてうっかり技術を持っていかれたなどということがないように慎重に考えている。酒田の農業を中国にPRしたいという考えもあるようなので、今後すり合わせしていく。

記者／航路について、5月10日に開設されたということによいか。

市長／そのとおり。

記者／これは酒田の働きかけによるものか。

市長／私自身はそう思っている。昨年12月池袋で唐山港の商談会があった。そこで酒田港をアピールし、友好都市で30年も交流を続けている関係を鑑みてぜひ開設をお願いしたいと売り込みをしてきた。

記者／新規航路では釜山港で荷物を積み替えるわけだが、酒田港からの枠は常にあるのか。

市長／そうではない。酒田からの荷物があれば釜山で積み替えて京唐港にいけるようになったということ。

記者／唐山の人口は 760 万人とあった。その市場だけでなく北京も見据えているか。

市長／実際はそのように考えている。今のところは唐山周辺をターゲットにしている。

記者／米の話も出ていたが、くん蒸上屋については認可が下りたが天童の精米工場はまだ認可されていないのか。

市長／まだ認可されていない。

記者／航路が開設したので、更に働き掛けをしていかなければならないのでは。

市長／G20 が開催される。酒田のくん蒸上屋が中国政府の認定を受けたのが去年李克強氏が来日したとき。いい機会なのでこの機を逃さずに認定を受けれるよう関係機関に働きかけている。そうなれば山形の米が酒田港から中国に輸出できるので新たな展開が開けるのではないかという期待を持っている。

記者／改めて今回の訪問は、唐山でのトップセールスがメインか。

市長／そのとおり。

記者／5 月 10 日時点で航路開設したという情報はなかったか。

市長／現地に行くまでわからなかった。航路開設のお願いをしようというときに、初めて報告された。昨年の池袋のイベントからさまざまなアクションをしてきたので、それに答えてくれた中国的なおもてなしだったのかもしれない。

記者／改めてこの航路に市長として期待することは。

市長／酒、米、加工品をどんどん輸出できれば、基本的にこの地域の農業振興につながることに非常に期待している。地元の業界にお金が落ちることを狙いにしているので、地元の地域経済が活性化すれば、港がある街としては非常にメリットがある。友好都市という関係性を有効に使って新規航路が開けたということに、非常に満足感を持っている。まだ通路ができただけ。載せるものはこれから集約していかなければならないので、地元の産業界の皆さんから力を貸してもらいたい。

記者／北前船寄港地の日本遺産登録が追加登録され 45 市町になり範囲が広がったわけだが、どういった連携をしていくのか。来年度、文化庁からの支援はなくなる中でどういった事業をしていくのか。

市長／45 の市町でまとまって事業展開するのはむずかしいと考えている。地元にお金が落ちるという面からすると、北前船の寄港地としてと交流するのはいいことだと考えるので、おりにふれ、交流の理屈付けなればいいと考える。地域振興考えるときの一つの武器として、さまざまな地域と交流するときに使っていきたい。交流がなかった地域に対しても親近感が持てる。45 市町まとまってイベントをするのもいいことだと思う

が、はなからそういうことを狙うのではなく、酒田は酒田として、一つの街として寄港地というネットワークを活用しながらいろんな仕掛けをしていきたいと思っている。地域創生部交流推進調整監／北前船という言葉も全国的にはまだまだ認知されていないので、全国で北前船を評価してくれるようになれば、発信基地である酒田に来てくれる機会が生まれるのではないかと期待している。

以上